

れば、グリムの「死神」の日本への流入経路が気になるところである。

まず、先にも触れた事だが、円朝には、海外作品の翻案がいくつかあるが、そのうち、「名人くらべ(錦の舞衣)」に關する、(永井)の解説を引用しておく、「『錦の舞衣』は円朝が福地桜痴よりフランスの劇作家サルドウ作の正史劇『ラ・トスカ』の物語を教えられ、これを翻案した作品である。原作の初演は一八八七年であるが、四年後の明治二四(一八九一)に、円朝は、既に高座にかけていた。同じ原作をプッチーニが作曲し、歌劇として初演したより十年も早かったわけである」との事。円朝の海外作品の受容の一端がうかがわれる(プッチーニのオペラ「トスカ」は非常に有名なので、円朝の作品はこれの翻案だと思っっている方がおられるかもしれないが、そうではないという事、つまり、福地桜痴が持ちこんだのはオペラではないという事を、ここで、頭に置いておいていただきたい)。ちなみに、この円朝作品では、原作の「女声歌手トスカ」が、「女狂言師お須賀」として登場し、まるで、日本のオリジナル作品のようである(テキストは(円朝二)に収録されている)。落語「死神」が、まるで、日本固有の物語のように語られている事に通じるも

のを感じるが、これが、円朝流の翻案なのだろうが、この流儀に、日本流の外国文化受容術の一端が現れていると言うこともできよう(註五)。では、円朝がグリム童話に触れた形跡はないのか。

(柳田)(大日)によると、一八八七年(明治二〇年)にグリム童話の初の日本語訳(翻案)が登場して以来、落語「死神」が成立したとされる明治三〇年ごろまでに、いくつかの作品の邦訳が登場しているようだが、「死神の名づけ親」の邦訳は見つからない。こうなると、出版された邦訳以外に、文人によって、口頭で円朝に伝えられた可能性も考えなくてはならない。この点で、注目したいのが、(高橋)の記述である。同書によると、一八六二年に、日本の遺欧使節の誰かがグリム(兄)を訪問したという事が、ドイツ側の記録にあり、一方、日本側の記録では、その使節には、文学に造詣のありそうな文化人としては、福沢諭吉と福地桜痴(ジャーナリスト、作家、本名は福地源一郎)が通訳として加わっていたようだ。このうち、福沢諭吉については、非常に詳しい「福翁自伝」を遺しているにもかかわらず、グリムのことは何も書かれていないとの事。これらのことから考えると、グリムと面会したのは福地桜痴である可能性が高いという事にな